

発達の観点からみた
女性の親との心理的距離と Self-Esteem の関係 (2)
－ 「依存」か「服従」か、相関関係からの検討－

三 田 英 二

Relation between psychological distance
and Self-Esteem with women's parents
from the viewpoint concerning development (2).

MITA Eiji

I. 目的

青年期女性の自己形成過程を継続的に検討している。このところ、親への依存・服従が自己形成にどのように関係し、影響を与えているかを検討している（三田、2008, 2010, 2012, 2013）。

SE に対する親からの影響については、三田（2008）を参照していただきたい。このとき、得点上 SE は、青年期後期段階では、親との心理的な距離により群分けした各群には、有意差は見られず、成人期前期段階になり、親との心理的な距離が最も離れている群（「低依存・低服従」群（後述））だけが、発達的に有意に SE 得点を上昇させていた。

この研究では、SE の質的な側面を検討しているわけではなかったが、親との心理的な距離と SE の関係について、以下のように推測した。

青年期後期段階に関して、「高依存・高服従」群（後述）では、親に支えられ SE を維持している可能性が推測される。逆に、低依存・低服従」群（後述）は、自律的なことで SE を維持しているのではないだろうか。「高依存・低服従」群（後述）は、自己中心的な側面が推測でき、幼児的な万能感を継続することで、SE を維持しているとも推測された。「低依存・高服従」群は、親との愛着関係は薄い、親の指示にさえ従っていれば安定しているという意味で SE を維持できるのではないだろうか、と当初推測したが、この時点で検討した結果（三田、2008）や、その後の検討（三田、2012, 2013）で、「低依存・高服従」群は、親との親和性が高い群を考えられた。

成人期前期段階になると、「自律的」と推定される群（「低依存・低服従」群）だけが SE を上昇させ、他の群より、有意に高い SE を獲得していた。いってみれば、親に「依存」や「服従」することなく、個人の力で、自己効力感を高めていき、成熟していった群と考えられた。他の群の結果が意味するところは、成人期以降は、親との関係の中で SE を維持することは破綻していく、ということを示唆する結果かもしれないと考えた。あるいは、成人期に移行しても親からの心理的な自立が図れずに、「依存」という心理的な状態が渡邊（1995）が指摘する「依存は抑圧・禁止されるべき否定的概念」となって SE を上昇させることができなかつたことを示している結果とも考えられる。

発達段階によって、社会から望まれる親子関係があり、青年期の終了までは、親から心理的な自立をしていなくとも、心理的な圧力にはならないが、社会から親との心理的自立を図るべきと要請される発達段階（成人期）になると、親から心理的に自立していないことが逆に心理的な圧力となることが、この研究（三田、2008）の結果から推測された。

本研究では、親への「依存」・「服従」と SE の関係を各群（後述）ごとに検討することを目的としている。性格特性との関連については、すでに検討している（三田、2012, 2013）。この結果、全般的には、親への「依存」よりも親への「服従」の方が、性格特性との関連が強かった。これは、親への「依存」が生得的な状態になっているため自覚しにくく、親への「服従」の方が、自覚しやすいためと考えられた。SE との関係においては、どのような関係になっているかを検討していく。

II. 方法

本研究は、同一データを使用し、継続的に行っているものである。調査対象者、使用した用具など、すべて同一であるが、参考までに記載する。

1. 調査対象者

青年期後期段階の女性の調査対象者（以下、青年期後期群）90名（平均年齢 19.18 歳、SD=.76, range18-21）。成人期前期段階の女性の調査対象者（以下、成人期前期群）80名（平均年齢 25.98 歳、SD=2.09, range22-30）とした。

青年期後期群は、授業中に調査用紙を配布・回収し、成人期前期群は、郵送により配布・回収した(回収率 60%)。

2. 調査用具

(1) 親との心理的な距離の測定およびグループ分け

加藤・高木（1980）が作成した独立意識尺度を三田（2003）が因子分析した結果を用いる。第1因子「自己決断力」（項目 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 35, 36）、第2因子「親への依存」（項目 20, 21, 22, 23, 24, 25, 27, 33）、第3因子「時間的展望の拡散」（項目 3, 13, 14）、第4因子「反抗期心理」（項目 28, 30, 31, 37）、第5因子「自信の欠如による親への服従（以下「親への服従」と略記）」（項目 17, 18, 26, 29, 34）の5因子が抽出されている（付録1参照）。

各項目ごと「全く自分にあてはまる」から「全く自分にあてはまらない」までの5件法により回答を求め、全く自分にあてはまる」を5点とし、順次「全く自分にあてはまらない」まで4, 3, 2, 1点として処理を行った。

なお、親に関係する項目への回答にあたっては、特に「父親に対して」あるいは「母親に対して」ということは教示せず、回答者の判断に任せた。青年期後期群での調査において、調査対象者からはこの点に関する質問は全くなかった（成人期前期群では郵送による調査のためこの点に関しては不明である）。

親との心理的な距離を測定する項目として、このうち、第2因子「親への依存」因子と第5因子「親への服従」因子の項目を用いる。「親への依存」得点の理論上の range は8点から 40点となる。「親への服従」得点の理論上の range は5点から 25点となる。中央値は「親への依存」因子で、青年期後期群 24点、成人期前期群 25点、「親への服従」因子で、青年期後期群 12点、成人期前期群 11点となった。

青年期後期群・成人期前期群別々に、それぞれの因子得点の中央値をもとに、高依存群・低依存群、高服従群・低服従群」に分け、分析用にさらにそれをクロスさせ、高依存・高服従群、高依存・低服従群、低依存・高服従群、低依存・低服従群」の4群に分けた。その内訳を Table 1 に示す。

Table 1 各群の人数

青年期後期群	n	成人期前期群	n
高依存・高服従群	22	高依存・高服従群	24
高依存・低服従群	19	高依存・低服従群	16
低依存・高服従群	18	低依存・高服従群	9
低依存・低服従群	31	低依存・低服従群	31
合計	90	合計	80

(2) Self-Esteem の測定

SE を測定する用具として、Rosenberg self-esteem 尺度^{注1} (以下、RSE と略記)を使用した。

今回の分析データは、前述の通り継続的に使用しているデータである。RSE についても三田 (2007, 2008) で使用したものと同一である。以下も、三田 (2007, 2008) の記載と重複するが、参考までに記載しておくことにする。

内的整合性係数は、RSE 全体では、.810 と良好な値を示した。このため、RSE は単一構造として考え使用した方が良いのかもしれない。しかし、今回調査では、より詳細に検討したいと考えているため、因子分析した結果を用いる。複数の下位因子に分かれるため内的整合性係数は低下すると考えられる。内的整合性係数の低下が危惧されるが、上述の目的のため、RSE を因子分析した結果、最も多く下位因子を抽出している三田 (2000 ; 付録2 参照) の結果を今回用いることにする。第1因子「自己矮小感」(項目2, 5, 6, 8, 9)、第2因子「自負心」(項目3, 4, 7)、第3因子「自己肯定感」(項目1, 10)となっている。

今回データから内的整合性係数を算出したところ、RSE 全体で.810、第1因子「自己矮小感」は.756、第2因子「自負心」.618、第3因子「自己肯定感」.498 (今回、分析に使用したデータが付録2で示しているデータとは異なるため、数値が異なっていることに注意されたい。)であった。第1因子はある程度の内的整合性係数の値は確保できたが、予想通り、特に項目数が少ない第3因子は低い値となった。このため、分析に当たっては、RSE 全体の得点も用いて行いたいと思う。

評点は、独立意識尺度との整合性をとるため、ほとんど思わない」から「非常にしばしば思う」までの5件法により回答を求めた。理論上の得点範囲は、RSE 全体では、10点から50点となる。因子ごとでは、第1因子「自己矮小感」5点から25点、第2因子「自負心」3点から15点、第3因子「自己肯定感」2点から10点となる。高得点の方が高SEとなる。第1因子「自己矮小感」は、高得点は矮小感が弱いことを示し、低得点が矮小感が強いことを示すことになる。

III. 結果

各群ごと、「親への依存」因子、「親への服従」因子と、RSE 総得点 (RSE 全体)、RSE の下位因子 («自己矮小感」因子 («矮小感」と略記)、「自負心」因子、「自己肯定感」因子 («肯定感」と略記)) の相関値 (Spearman の順位相関) を求めた。この結果を、Table 2 ~ Table

17に示す。

(1) 「高依存・高服従」群

① 「親への依存」因子との相関

Table 2 青年期後期群 (n=22) 「親への依存」因子との相関

	矮小観	自負心	肯定感	RSE 全体
r	-.007	.262	-.282	.048
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

* . . . p<.10 ** . . . p<.05

Table 3 成人期前期群 (n=24) 「親への依存」因子との相関

	矮小観	自負心	肯定感	RSE 全体
r	.027	.163	-.001	.072
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

* . . . p<.10 ** . . . p<.05

② 「親への服従」因子との相関

Table 4 青年期後期群 (n=22) 「親への服従」因子との相関

	矮小観	自負心	肯定感	RSE 全体
r	.257	-.100	-.092	.056
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

* . . . p<.10 ** . . . p<.05

Table 5 成人期前期群 (n=24) 「親への服従」因子との相関

	矮小観	自負心	肯定感	RSE 全体
r	-.332	.121	.033	-.165
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

* . . . p<.10 ** . . . p<.05

青年期後期群、成人期前期群の「高依存・高服従」群では、「親への依存」因子、「親への服従」因子とも RSE 関連因子との間に有意な相関は見られなかった。

(2) 「高依存・低服従」群

① 「親への依存」因子との相関

Table 6 青年期後期群 (n=19) 「親への依存」因子との相関

	矮小観	自負心	肯定感	RSE 全体
r	-.301	-.105	.085	-.282
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

* . . . p<.10 ** . . . p<.05

Table 7 成人期前期群 (n=16) 「親への依存」因子との相関

	矮小観	自負心	肯定感	RSE 全体
r	.091	.011	.048	-.043
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

* . . . p<.10 ** p<.05

② 「親への服従」因子との相関

Table 8 青年期後期群 (n=19) 「親への服従」因子との相関

	矮小観	自負心	肯定感	RSE 全体
r	-.062	.194	-.222	-.070
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

* p<.10 ** p<.05

Table 9 成人期前期群 (n=16) 「親への服従」因子との相関

	矮小観	自負心	肯定感	RSE 全体
r	-.408	.192	-.389	-.227
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

* p<.10 ** p<.05

「高依存・低服従」群では、青年期後期群、成人期前期群とも、「親への依存」因子、「親への服従」因子とも RSE 関連因子との間に有意な相関は見られなかった。

(3) 「低依存・高服従」群

① 「親への依存」因子との相関

Table 10 青年期後期群 (n=18) 「親への依存」因子との相関

	矮小観	自負心	肯定感	RSE 全体
r	.147	.463	.370	.420
p	n.s.	*	n.s.	*

* p<.10 ** p<.05

Table 11 成人期前期群 (n=9) 「親への依存」因子との相関

	矮小観	自負心	肯定感	RSE 全体
r	.373	-.013	.268	.170
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

* p<.10 ** p<.05

②「親への服従」因子との相関

Table 12 青年期後期群の低依存・高服従群 (n=18)「親への服従」因子との相関

	矮小観	自負心	肯定感	RSE 全体
r	-.276	.124	-.484	-.321
p	n.s.	n.s.	**	n.s.

* . . . p<.10 ** p<.05

Table 13 成人期前期群 (n=9)「親への服従」因子との相関

	矮小観	自負心	肯定感	RSE 全体
r	-.528	-.141	-.638	-.581
p	n.s.	n.s.	*	n.s.

* . . . p<.10 ** p<.05

青年期後期群の「低依存・高服従」群では、RSE 総得点と RSE 下位因子「自負心」因子との間に、それぞれ「親への依存」因子と 10%水準で正の有意傾向が見られた。

このことは、親に依存することと高 SE、自負心の高さが関連していることを示している。

また、「親への服従」因子と RSE 下位因子「自己肯定感」因子に有意な負の相関（5%水準）が見られた。

このことは、親に服従することと自己肯定感の低さが関連していることを示している。

成人期前期群の「低依存・高服従」群では、「親への依存」因子と RSE 関連因子とは有意な相関関係は見られなかったが、「親への服従」因子と RSE 下位因子「自己肯定感」因子と負の相関（有意傾向）が見られた。

このことは、親に服従することと自己肯定感の低さが関連していることを示している。

(4)「低依存・低服従」群

①「親への依存」因子との相関

Table 14 青年期後期群 (n=31)「親への依存」因子との相関

	矮小観	自負心	肯定感	RSE 全体
r	-.012	.041	.032	.033
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

* . . . p<.10 ** p<.05

Table 15 成人期前期群 (n=31)「親への依存」因子との相関

	矮小観	自負心	肯定感	RSE 全体
r	.191	-.013	.117	.179
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

* . . . p<.10 ** p<.05

②「親への服従」因子との相関

Table 16 青年期後期群 (n=31) 「親への服従」因子との相関

	矮小観	自負心	肯定感	RSE 全体
r	-.127	.059	-.009	-.079
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

* . . . p<.10 ** p<.05

Table 17 成人期前期群 (n=31) 「親への服従」因子との相関

	矮小観	自負心	肯定感	RSE 全体
r	-.041	.025	.024	.018
p	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

* p<.10 ** p<.05

「低依存・低服従」群では、青年期後期群、成人期前期群とも、「親への依存」因子、「親への服従」因子とも RSE 関連因子との間に有意な相関は見られなかった。

IV. 考察

「低依存・高服従」群以外、有意な相関は見られなかった。これまでの調査（三田、2012、2013）から「低依存・高服従」群は、親との親和性が高い群と考えてきた。今回の分析で、青年期後期群、成人期前期群ともに、「親への服従」因子と「自己肯定感」因子の間に、負の相関関係を示した。このことは、親に「服従」することと自己肯定感の低さが関係していることを示しているが、このことについては、肯定的な解釈と否定的な解釈が成り立つと考えられる。

肯定的な解釈としては、親との親和性の高さから、「親への服従」因子の略記された部分、「自信の欠如・・・」と自己肯定感の低さが相関関係を持ち、自分を肯定的にとらえられないときには、親の指示に従う、といったものである。

否定的な解釈としては、親の高圧的な態度とそれに押しつぶされた結果としての自己肯定感の低さが相関関係を持った場合である。

これまでの検討結果（三田、2012、2013）から前者の肯定的な解釈を採用したいと考えている。

成人期前期段階では見られなかったが、青年期後期段階では、「親へお依存」因子と RSE 総得点と「自負心」因子との間に有意な正の相関関係が見られた。親に「依存」することと「自負心」すなわち自信や誇りが関係していることを示している。「親への服従」因子と「自己肯定感」因子との負の相関関係を否定的な解釈で考えると「親への依存」因子との相関関係に矛盾が生じてしまうと思われる。成人期前期段階では、これまで何度か指摘してきた親への「依存」が「許容されない発達段階」であるため、「親への依存」因子と RSE 関連因子と有意な相関関係は見られなくなるが、親との親和性の高さから、自己を肯定的にとらえられないときに、親和性がある親に「服従」、すなわち親の意見に従うことに相

関関係が見られたのではないだろうか。

他の群については、「親への依存」因子、「親への服従」因子と SE との有意な相関関係は見られず、青年期後期段階、成人期前期段階ともに、親への依存・服従と SE とは関連がない、と考えるべきだが、三田（2008）の結果もあり、今後の検討課題としたい。

<参考・引用文献>

- ・加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 336-340.
- ・三田英二 2000 女子青年の Self-Esteem と社会態度に関する因子分析的研究 静岡県立大学短期大学部研究紀要 13-2, 247-260.
- ・三田英二 2003 独立意識からみた女性の自己の発達 青年心理学研究 15, 1-15.
- ・三田英二 2007 Self-Esteem からみた女性の独立意識—発達の観点から, 青年期後期と成人期前期の比較— 静岡県立大学短期大学部研究紀要 20-W-4, 1-11.
- ・三田英二 2008 発達の観点からみた女性の親との心理的距離と Self-Esteem の関係 静岡県立大学短期大学部研究紀要 21, 37-48.
- ・三田英二 2010 発達の観点からみた女性の親からの心理的距離と性格特性との関係 静岡県立大学短期大学部研究紀要 24-W-2, 1-22.
- ・三田英二 2012 発達の観点からみた女性の親との心理的距離と性格特性の関係 (2) —「依存」か「服従」か、相関関係からの検討— 静岡県立大学短期大学部研究紀要 26-W-1, 1-22.
- ・三田英二 2013 発達の観点からみた女性の親との心理的距離と性格特性の関係 (3) —「依存」か「服従」か、因果関係からの検討— 静岡県立大学短期大学部研究紀要 27-W-2, 1-12.
- ・渡邊恵子 1995 自立再考 柏木恵子・高橋恵子 (編著) 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房 77-101.

付録1 独立意識尺度の因子分析結果（回転後）

（三田，2003 を一部改変）

	I	II	III	IV	V	共通性
6. 人の意見もよく聞くが、最終的には自分で決断できる。	.740	-.014	-.031	.036	-.056	.553
8. まわりの人と意見がちがっても、自分が正しいと思うことを主張できる。	.712	.046	.016	.294	-.109	.608
5. 生きることの意味や価値を自分で見出すことができる。	.699	.008	-.257	-.077	.038	.562
36. どうしたらよいか、自分で決心できないことが多い。	-.661	.139	.276	.278	.275	.686
4. 自分自身の判断に責任を持って行動することができる。	.625	-.125	.026	-.135	-.059	.429
35. 他人の意見や流行に、つい引き込まれてしまう。	-.585	.049	.043	.203	.237	.443
7. 生活の中に自分の個性を生かそうと努めている。	.583	.227	-.345	.115	.108	.535
10. 自分の意見を言えずに、相手に従ってしまうことが多い。	-.570	.190	.222	-.111	.262	.491
9. 小さなことでも、自分で決断することができない。	-.519	.026	.186	.120	.216	.366
22. つらい時、悲しい時に、親のことがますます浮かぶ。	-.035	.831	.051	.002	.059	.698
20. 親といるだけで何となく安心できる。	-.060	.795	.148	-.067	.021	.662
24. 親は自分の心の支えである。	.014	.786	.014	.030	.018	.620
23. できることなら、いつも両親と一緒にいたい。	-.014	.783	.026	-.056	.057	.620
21. 困った時は親に頼りたくなる。	-.141	.714	.149	.010	-.025	.553
25. 何かする時は、親に助けをもらいたい。	-.049	.653	-.078	.260	.312	.600
33. 両親に対して自分のことを打ち明けて話す気がおぼろしい。	-.143	-.645	.048	.259	.160	.531
27. 親に何かにつけ、味方になってもらいたい。	-.073	.543	-.086	.256	.382	.519
14. 将来、どんな職業をつらたらよいかわからない。	.015	.062	.857	.028	.126	.755
13. 自分の本当になりたいことが何なのかわからない。	-.194	-.005	.758	.150	-.010	.635
3. 時分の将来の進路や目標を自分で決めることができる。	.324	-.121	-.687	-.023	-.159	.618
31. 両親に反抗し、あとで後悔することが多い。	-.067	.177	.064	.698	-.180	.560
30. 親や先生のいうことには、たとえ正しくても反対したくなる。	-.010	-.030	.063	.691	-.098	.492
28. 両親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになることが多い。	.113	-.325	.110	.575	-.031	.461
37. いつでも相手になってくれる友達がほしい。	-.290	.113	-.047	.531	.066	.385

18. 親こさからえないで、言うとおりになってしまうやすい。	-.124	.025	.141	-.033	.748	.597
29. 親の言うことには素直に従っている。	.007	.295	.029	-.329	.637	.602
26. 自分で決心できないときは、親の意見に従うようにしている	-.065	.469	.035	.153	.543	.544
34. 親に対して自分の意見を主張したいが、自信を持ってない。	-.267	-.300	.031	.213	.526	.484
17. たとえ学校の成績が悪くても、人間として、ひねめを感じることは多い。	.279	.003	-.110	.037	-.517	.359
1. 自分の人生を自分で築いていく自信がある。	.495	-.014	-.472	-.159	-.112	.506
2. 人生で出会う多くの困難は、自分の力で克服することができると思う。	.291	-.023	-.363	-.248	.079	.285
11. 社会の中で自分の果たすべき役割があると思う。	.466	.119	-.423	.026	.015	.412
12. 自分の考えが変わりやすく自信をもてない。	-.488	.070	.171	.413	.145	.464
15. 自分の意志で、欲望や感情をコントロールする(かまんしたり、調節したりする)ことができる。	.134	.029	-.155	-.493	-.246	.346
16. 自分の考えや行動を抑えられたり、統制されたりすることには強い反発を感じる。	.151	-.097	-.229	.418	-.034	.261
19. 外から与えられたわくの中で生活する方が安心できる。	-.148	.133	.481	-.049	.334	.385
32. 大人に対してひねめを感じることも多い。	-.081	.116	.259	.446	.304	.378
二乗和	7.48	4.83	2.85	2.02	1.83	
寄与率(%)	20.2	13.0	7.7	5.5	4.9	
α	.850	.876	.809	.619	.680	

付録2 RSE の因子分析結果 (回転後)
(三田, 2000 を一部改変)

	I	II	III	共通性
2 私はときどき、自分がてんでだめだと思う。	.724	-.152	-.014	.547
5 私にはあまり得意に思うことはない。	.444	-.358	-.324	.430
6 私は時々たしかに自分が役立たずだと感じる。	.708	-.133	.022	.519
8 もう少し自分を尊敬できたならばと思う。	.595	.287	-.256	.501
9 どんなときでも例外なく、自分を失敗者だと思いがちだ。	.583	-.312	-.198	.476
3 私は、自分にはいくつか見どころがあると思っている。	-.169	.597	.382	.531
4 私はたいいていの人がやれる程度には物事ができる。	-.113	.748	.006	.572
7 私は少なくとも自分が他人と同じレベルに立つだけの価値ある人だと思う。	-.089	.819	.075	.685
1 私はすべての点で自分に満足している。	-.125	-.003	.745	.570
10 私は自身に対して前向き態度をとっている。	-.044	.195	.738	.585
二乗和	3.03	1.34	1.04	
寄与率(%)	30.23	13.42	10.42	
α ^{注2}	.658	.667	.430	

注1: RSE については、アイデンティティの心理学 (遠藤辰雄 (編) 1981 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版) p.65 に掲載された星野 (星野命 1970 感情の心理と教育 (一, 二) 児童心理 24, 7および8, 1264-1286, 1445-1477) の訳を使用した。

注2: 本文中に記載した内的整合性係数 (α) は、本論文で使用している調査データを用いて算出したものである。付録2で示している内的整合性係数は、三田 (2000) が調査したときのデータである。異なるデータを使用しているため、内的整合性係数の数値が異なっている。

(2014年5月15日 受理)